

國學院大學學術情報リポジトリ

Studies on Folk Narrative of Sanguo Zhi : A Case Study on the Legend of Guan Suo and Bao Sannian

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 立石, 展大 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000890 |

口承三国志の研究 関索と鮑三娘を例として

立石 展大

一、文献上の関索と鮑三娘について

関索と鮑三娘はともに架空の人物である。関索は、毛宗崗本『三国志演義』において、関羽の三男とされ、孔明が南征をおこなう際に登場する。「荊州失陥以来、鮑家莊に逃れ、病を養っていた」と現れ、その後、孔明の南蛮征伐に同行。陳寿『三国志』および裴松之の注、また最古の刊本「弘治本（嘉靖本）」には登場しない。

金文京『三国志演義の世界』増補版^[1]では、「明代後期に福建地方で出版されたテキストの多くには、この人物について毛本よりさらに詳しい別系統の話を載せているが、いずれも突然あらわれていつの間にか消えてしまうこと、それに鮑家莊にいたとか、呉の仇敵はみな誅殺されたとか、なにやら得体の知れぬことを口走り、小説全体のス

トリーとどこか調子が合わないところが共通している」
（二七七頁）と解説されている。

この関索の物語については『花關索傳』という文献が見される。「一九六七年、上海市北西の嘉定県で偶然ひとつの古い墓が発掘された。その墓の主の棺を開くと、屍体の枕元に数冊の本が置かれていたが、調査の結果、それらは明の成化年間（一四六五年—一四八七年）到北京の永順堂という本屋が刊行した十六種の説唱詞話および戯曲「白兔記」であることが判明したのである。説唱詞話というのは、元明代の民間で流行した語り物の一種で、主に七言句による韻文のうたと散文のせりふによって物語をかたる形式である。そのなかのひとつに関索を主人公とした物語、『花関索伝』があった。」（金文京『三国志演義の世界』増補版 一八〇頁）ということで、当時の語り物の主人公と

して関索が活躍していたことが窺える。

一方の鮑三娘は、この『花關索傳』に登場する人物で、関索の妻である。『三国志演義』には登場しない。『花關索傳』では、鮑家莊の王、鮑凱の娘として登場する。関索が手に入れた南海赤龍鱗甲で鎧を作ろうとすると、鮑三娘が作れると部下から聞く。鮑家莊の入口の碑には「自分と戦つて勝つた者を夫にする」とあり、関索が父王と二人の兄を打ち負かし、鮑三娘と戦う。鮑三娘は五角に戦うが、結局生け捕りにされて関索と結婚する。その後は関索に従うが、劉備の死後、関索も病没すると故郷に帰る。

このように文献において主に『花關索傳』で描かれる二人は、口承文芸の民間説話（本稿では主に昔話と伝説）においても語られてきた。そこで本稿では、民間説話中の関索と鮑三娘を分析し、『花關索傳』と民間説話との繋がり、さらには二人の人物造形の特徴を明らかにしていく。

二、関索と「小童子譚」との関係

『花關索傳』において関索は「小人」として描かれる。

『花關索傳』および記載内容に対する先行研究としては、古屋昭弘・井上泰山・大木康・金文京・氷上正『花關索傳

の研究^②が、挙げられる。影印と校注が載せられているほか、内容についての解説もおこなわれており、まさに『花關索傳』の総合的研究といえる。その一章『花關索傳』と民間傳承（六三頁）において、金文京氏が関索は「小人」であったことを指摘している。この「小人」の根拠として次の三箇所の記事を挙げている。『花關索傳』は前集・後集・續集・別集からなり、後集の「先主二人赴宴」には「上下不長四尺五」と関索が描かれ、同じくすぐ後では「身材不抵拳來大」と描かれている。また、明の錢希言による『猿園』では、当時流行していた「彈唱詞話」の文句の引用として「棗核様小花関索」と書かれている。そして結論として『花關索傳』はこの武勇に秀でた小童が、廉康、呂高などの大男を次々に退治してゆく物語であると見ることが可能であり、その意味では、一寸法師や桃太郎の鬼退治の話（『花關索傳』の廉康は鬼頭である）とさわめて似た点があるのである。（六三頁）とまとめている。

つまり、『猿園』にあるように関索は「棗の種のような」と形容され、語られていた。その関索が『花關索傳』では「身長が四尺五寸もない」「体は拳ほどの大きさもない」と描かれている。

実は、中国の口承文芸、とりわけ民間説話においては、

中国全土で「小さ子」譚が語られている。神の申し子として誕生した小さな主人公が活躍する話である。劉守華主編『中国民間故事類型研究』の「怪異兒的英雄傳奇」（四五—四六二頁）ではこの「小さ子」譚を次のように三分類している。

①「結親（嫁取り）型」：小さ子（例えば卵）が嫁取りをする。嫁の父に求められた金銀を手に入れて渡したり、幾つもの輿の外から嫁を当てたりして、難題を解決して嫁取りする。そして、卵から立派な男が出てくる。

②「除惡造福（悪を除き、福をもたらす）型」：「棗核児（棗の種太郎）」が代表例。

③「歴險（冒険）型」：牛や虎などに食べられて遠くに運ばれてしまう。そこから、父母の元に帰る。

ここに挙げた②の「棗核児（棗の種太郎）」は、まさに棗の種から生まれた、そして棗の種ほどの大きさの「小さ子」である。

具体的に、一話を日本語訳して次に挙げる。

「棗核児」

八月一日が来ると、家ごとに車座になって中秋節を過ごす。西崗彎区の張家の老夫婦は、中秋節のこの日、月餅を食べているが、彼らには子どもがおらず寂しかった。お婆さんは、月餅の中から棗の種を出すと、それを持ってお爺さんに言った。「ああ、棗の種のような大きさの子どもでもいたらいいのに！」そう言ったとたん、棗の種がポンと地面に落ちて、「お爺さん、お婆さん」と言った。二人が棗の種を拾い上げてみると、それには手も足も鼻も目も、全てが揃っていた。二人は、子どもができてそれはそれは喜んだ。しかし、この棗の種太郎は、いつまで経っても大きくならず、いつもピョンピョンと跳ねて、なんともかわいらしかった。

ある日、役所の下役が門の前を通った。酒瓶を二本持つて、ここで便所に行きたくなったので、その酒を窓辺に置いた。棗の種太郎は酒瓶が面白く、その周りで跳ねていた。うっかりと瓶を落として割ってしまった。下役は許さず、棗の種太郎は県長の官の所に連れて行かれた。長官が裁判の執務室に来ると、口を開かないうちに棗の種太郎は、悪役人を罵り始めた。長官は怒って「であえ！」と言うべく、最初の言葉を発しようとするや、棗の種太郎は跳ねて、

その長官の口に飛び入った。そして喉を通つて腹の中に滑り込んだ。さらに腸を振り回すと「ブランコ、ブランコ、三千六百年」と歌つた。長官はそれを聞くと「何てことだ。三千六百年はおろか、ちよつとでも耐えられない」長官は泣きついた。「早く出てくれ、褒美をやるから」棗の種太郎は言つた。「もう財を食らいな」長官はすぐに言つた。「ない、ない、食らない」そう言っている間に、棗の種太郎は腹から飛びだした。

しかし長官は、更に腹を立てた。堂々たる長官が、こんなちびにひどくからかわれた。そこで「であえ」とまた口を開くや、棗の種太郎は再び腹に飛び込んだ。そして腹の中で歌つた。「ブランコ、ブランコ、今度は三万六千年」これには長官も肝をつぶして言つた。「早く、早く出てきてくれ。何でも言うことを聞くから」棗の種太郎はすぐに言つた。「だめだだめだめ、腹の中で取り調べをするから。全ての受刑者を出してきて、取り調べをする」長官は仕方なく、全ての受刑者を尋問するしかなかった。長官は受刑者に言つた。「おまえは無実の罪を着せられたのか」その者は言つた。「はい」すると棗の種太郎が腹の中で言つた「おまゝと釈放だ」長官は、また別の者を取り調べた。「おまえは貧乏人か」その者は言つた「はい」また棗の種太郎

が言つた。「さつさと釈放だ」このようにして長官は受刑者一人ひとりを全員釈放してしまつた。

最後に長官が言つた。「監獄には、もう一人もいません」棗の種太郎が言つた。「さつさと民衆に害をなす悪人と地主を捕まえにいけ」長官は「はい、はい、はい」と応えて、すぐに下役を手分けして地主たちを捕まえに行くように言つた。下役が行つてしまうと、棗の種太郎はボンと飛び出して、長官に言つた。「まだ民衆を苦しめるなら、おまえの齒を折つてやる」そういうと、爺さんと婆さんと一緒に家に帰つた。

家に着くと、爺さんと婆さんはほおずりをして、空が暗くなつて寝る時も棗の種太郎を撫でていた。夜中になつて二人は息子の体からパキパキと音が鳴るのを聞いた。そして灯りをつけると、息子は白くて丸々とした子どもになつていたので、ことのほか喜んだ。さらに翌朝、起きてみると、棗の種太郎は立派な男になつていた。これ以後、老夫婦とその大切な息子は幸せな日々を過ごした。

わが国の「小さ子」の代表ともいえる「一寸法師」も、鬼の体内に入り込んで、鬼をさんざんに悩ませますが、この戦法は、中国も同様である。体が小さく、一見すれば弱い者が、

力のある悪者を退ける点に、庶民は喝采する。「棗の種太郎」は、中国に広く伝えられているので、話のバリエーションは多い。例えば、その他の代表的な「棗の種太郎」をまとめると、その梗概は次のようである。

神に願うと棗の種が子どもになる。役人が村人の牛や馬を奪い去る。棗の種太郎が役所に忍び込んで、牛や馬に耳打ちして役所から連れ帰る。役人が犯人捜しをするので、棗の種太郎が名乗り出る。棗の種太郎は、役所の長官のひげにぶら下がる。長官はそれを打つように下役に言いつけ、自分が叩かれる。

最初に挙げた話同様、悪い役人が登場し、こちらではひげにぶら下がって役人を翻弄する。いずれにしても、自身の体の小ささを武器にして戦っている。このような「棗の種太郎」の話の構造は、およそ次のようにまとめられる。

- ① 神の申し子として誕生。
- ② 小さいことを利用して、悪者を退治する。(腹の中で暴れる、ひげにぶら下がるなど)
- ③ 最後に立派な男になる場合もある。

さて、このような民間説話が伝えられていることを鑑みれば、『猿園』で関索を「棗の種のような」と形容する語りを民衆が聞くとき、その後民間説話の「小さ子」をイメージしたことは、充分に考えられる。

ただし『花關索傳』において関索が敵と戦う際には、敵の腹に入ることはない。あくまでも武芸によつて敵を倒す。また、『花關索傳』は四集に分かれ、それぞれ『新編全相説唱足本花關索出身傳』(前集)・『新編全相説唱足本花關索認父傳』(後集)・『新編足本花關索下四川傳』(續集)・『新編全相説唱足本花關索貶雲傳』(別集)と題名がつけられている。題名中に「全相」とあるように、全ての頁に挿絵がある。頁の upper 段が挿絵で、下段が本文の構成だが、その挿絵に描かれる関索は立派な若武者であり、決して「小さ子」ではない。

このように一見すると小さくはない関索だが、『花關索傳』を読んでいくと、やはり「小さ子」との繋がりを窺わせる表現を幾つか確認できる。例えば、後集の「關索戰廉旬」では、敵が関索を罵る言葉に「馬上不比拳來大 喉中吞你十來人」(馬上で拳ほどの大きさもない、おまえを十人でも丸呑みにしてやる)という表現が見られる。同じく續集の「關索與張琳舞劍」でも「坐在馬上拳來大 走在喉

中不噎人」(馬上にいる拳程度の大きさ、飲み込んでも喉につかえない)という表現で、敵が関索を罵る。いずれも関索に対峙した敵からの言葉である。小さい者を罵るのであれば「握りつぶす」でも「踏みつぶす」でも良さそうであるが、全て「飲み込む」である。関索の人物形成の背景に「小さ子」があることを考えれば、ここに挙げた「関索を飲み込む」と敵が罵るのも、「棗の種太郎」のモチーフが影響を与えたと見ることが出来る。

三、「難題聳」(娘の助言型)の影響と鮑三娘の人物形成

前節で挙げた「棗の種太郎」からの影響は、『花關索傳』全体から見れば、あくまでも部分的な表現に限られている。しかし、物語の内容に対する昔話や伝説などの民間説話からの影響も指摘できる。それは、関索と鮑三娘との関係にまつわる話である。

まず、前掲の『花關索傳の研究』で指摘されている、二人の婚姻に関わる話を挙げる。関索が鮑三娘を娶るべく、一騎打ちをする場面である。

「你也不輸 我也不贏(贏)。我有一個金錢、小(掛?)將

起來、金錢上有四個字、四字上射四前(箭)、金錢眼一裏射着了當輸。」(一一七頁)

梗概として、同書の一五頁では「二人の勝負はなかなかつかず、弓で銅錢の孔を射る試合をやるが、やはり引き分ける。」とまとめられている。

この部分の箇所については、同書『花關索傳』と民間傳承」の章で次のように解説されている。「四川と雲南の境界の涼山地區に住む彝族、藏族、普米族の間にも、やはり鮑三娘と關索が武勇を競って、のち結婚する話が傳わるが、この話には、二人が木の葉の同じ孔を弓で射ぬくことがみえ、『花關索傳』の錢孔を射る話を思わせる。」(六一～六二頁)

これは口承文芸に二人が矢を射る傳承がある指摘であり、「民間文学」(一九八一年第六期)がその典拠として挙げられている。これは関索と鮑三娘の伝説である。そして、この伝説には神話に繋がるモチーフや昔話「難題聳」譚のモチーフが含まれているので、次に日本語訳を挙げ確認する。ただし、紙幅の都合上、前記の二つのモチーフ部分以外は、梗概を記した。

「鮑三娘（諸葛亮南征の伝説）」

【梗概】

三国時代、涼山に邛都夷という民族がいた。部落の首領を鮑龍といつた。鮑龍には素晴らしい娘がいた。彼女は三番目の娘だったので、鮑三娘と呼ばれた。幼いころから武芸を学び、聡明だった。一六歳の時には抜きん出て、父親も三番目とはいえ、掌中の珠のように可愛がっていた。

ある年、諸葛亮が大軍を率いて南征を開始した。鮑龍は諸葛亮が悪い人物で侵略に来て、王位も奪いに来たと考えた。そこで鮑龍は軍を整えて攻撃を開始した。しかし、諸葛亮は小部隊であしらって、別部隊で瀘沽口の東の城を奪った。そして西の城の鮑龍を包囲した。鮑龍は強行突破をしようとしたが、鮑三娘は「自分たちが陣地を守っていれば、諸葛亮の軍は遠征の上に風土に馴染めず耐えられない。そこを不意打ちしよう」と止める。はたして、そのとおりになったので鮑三娘は部隊を率いて討つて出た。漢兵（蜀兵）は手向かう間もなく大敗して、鮑三娘は孫水河対岸の東の城まで攻めた。攻め込もうとすると、はからずも、赤兔馬に乗った若い将軍が遮る。関雲長の息子の関索だった。

二人は一騎打ちをするが、決着がつかない。関索は鮑三

娘の強さと美しさを密かに讚えた。続けざまに数日、二人は戦場で会つたが、ともに探りを入れるのみで、互いの心には知らないうちに愛情が育ちつつあった。

関索は、鮑三娘への想いを抱え、ある晩、陣地の城の上をそぞろに歩いた。すると対岸の城で髪をとかしている鮑三娘を見つける。そこで彼は桜の枝を矢に結んで射た。矢は鮑三娘の木櫛にあたり、櫛は二つに割れた。彼女は関索の想いを知り、桜を大切にしようと、櫛の半分を関索の矢に結んで射返した。

関索は半分の櫛を受け取ると、気持ちが高まったが、どうしたらいいか分からず諸葛亮に託した。ちょうど諸葛亮は戦が長引かず、しかも両者がうまくいく策を考えていたので、関索が鮑三娘に求婚したいという願いを喜んだ。

翌日、諸葛亮は使者を派遣した。鮑龍も、諸葛亮が評判どおりの知謀と人徳があり、関將軍も武勇と容姿に優れているのを見て、講和を考えていた。鮑龍は使者を最初は歓迎したが、その使者が講和ではなく婚姻の申し込みであることが分かると激怒した。しかし、使者が鮑三娘の櫛を出して事情を話し、鮑龍も娘の気持ちを確認すると、鮑龍は関索に直接婚姻を申し込みに来るように伝える。

【六三頁～六四頁の日本語訳】

翌日、果たして関索が自ら婚姻を申し込みに来た。鮑龍が言った。「聡明な將軍よ。我ら夷の夫婦は神が定める。もし、三つのことができれば、娘はそなたのものだ」関索は慌ただしく尋ねた。「尊い大王、どんな三つのことでしょるか」鮑龍は、娘と関索を並ばせると言った。「二人それぞれ弓を持って、同時に木の葉を射る。もし、同じ所を射貫けば、天の神が二人に同じ真心を与えたということだ。真心が同じ者こそが夫婦となる。そなたたちがする最初のことだ」関索は、これは容易いと思った。そこで、鮑三娘と一緒に弓を受け取り、言われた葉に狙いを定めると、同時に矢を放った。シュツと音がすると、葉には丸い孔が一つだけ残っていた。無事に最初のことが終わった。

続けて、鮑龍は年輩の者に石臼を運ばせた。そして、関索と鮑三娘に言った。「それぞれが、臼の片方を持ち、分かれて屋敷の後ろの山の斜面から転がせ。もし、神が二人と一緒にすることを定めるのなら、臼は転がった後、自然と合わさる。これが二つ目だ」これには関索も困り果て、どうしたものか心を決めかねた。この時、横に立っていた鮑三娘が、すぐに水を持ってこさせると、自ら関索の前に運び、「閔將軍水をどうぞ」とわざと「水」に力を込めて言った。関索は、その意味がすぐに分かり、文句を言わず

に臼の片方を持って山の斜面を登った。「ドン、ドン、ドン」と三回太鼓の音が響いた後、それぞれの臼が斜面をゴロゴロと転がり、ポトンという音がして河に沈んだ。河は深く、どうして臼が合わさったことが分かるか。しかし、鮑三娘はこの目で合わさったのを見たので、信じないなら引き上げて証明すると言い張った。鮑龍は仕方なく、人をやって引き上げさせた。果たして、確かに合わさった臼が引き上げられた。実は、鮑三娘は父親がこの手で来る事が分かっていた、事前に臼を河に沈めておいた。そして、関索が何か言う前に水を渡して、臼を水に沈めるよう関索に暗示したのだった。

関索と鮑三娘は無事に二つ目を終え、最後の一つを待った。この時、鮑龍が関索の前に来ると言った。「誠実な若者よ、私は漢の人々が、結婚を街でおこなうことを知っている。三日のうちに漢の城を建てよ。私の言うことができたら、鮑三娘と婚礼を挙げてよい」関索は、それを聞くと一気に落ち込んでしまった。城を建てるのは膨大な工事で、少なくとも八ヶ月から十ヶ月かかる。たった三日とは、私へのいやがらせではないか。口ごもっていると、賢い鮑三娘は、関索の心を見抜いて、そつと関索の襟を二度引いた。それが布で囲って城を建てることを意味していると関索は

気づき、すぐに成算が生まれ了解した。

鮑龍は毎日関索の築城の動きを観察していたが、一日目、二日目と過ぎて、何の工事の兆しもなかった。三日目の夜も相変わらずだった。そこで彼は関索の築城は絶対に行きないと判断して、部屋に戻って鶏が三度鳴くまで布団をかぶって寝てしまった。すると突然、関索の城が完成しているとの報告が入った。鮑龍は急いで起きて見に行くと、あつげにとられた。対岸の盛り土の陣地に、ほおっと暗く城郭がそびえ立っている。鮑龍は関索の力に心底感服して、彼の求婚を受け入れた。

【梗概】

その後、二人は結婚した。関索は更に南征に従うが、戦死してしまう。鮑三娘は涙に暮れて、孫水河を臨む岸辺で化粧をした。その場所を化粧台（梳妝台）と呼び、関索が布で覆った盛り土の陣地を関索城と呼んだ。

右の伝承の全体は「難題智（娘の助言型）」を基にしている。婚姻の際に娘の父親（もしくは娘に横恋慕した権力者）が、若者に難題を課し、若者が娘の助言で難題を解決する。これが「難題智（娘の助言型）」で、昔話の一話型である。この話型は、国際昔話話型でATU四六五番に分

類されるほど、世界的に広がる昔話である。

この昔話が、関索と鮑三娘の伝説に組み込まれた。その難題をまとめると、次に挙げる三つである。

第一の難題「矢を射って、同じ葉を射抜く」

第二の難題「離れた場所から転がした白を合わせる」

第三の難題「三日で築城する」

このうちの、第一と第二の難題は、中国神話の兄妹神婚型における婚姻儀礼でも語られるモチーフである。例えば二〇〇七年八月に中国貴州省黎平県岩洞で調査した時に聞き取った「人類の起源⁶」は次のような内容だった。語り手はトン族の呉良修氏（男性・一九四四年七月一五日生）である。

私はこれから人類がどこから来たのか語る。

昔々、大雨が降り続き、洪水が起きた。人類は皆おぼれて死んでしまい、姜良と姜妹の兄妹が残った。その時、彼らはひょうたんの中に入っていた。ひょうたんは、穀物を入れる桶のように大きかった。二人はひょうたんに乗って漂流して、最後、洪水は収まり、水もなくなった。人類もいなくなり、ただ兄と妹だけが残って、世界に二人しかいなくなった。姜良、姜妹は兄妹であったため、二人で人類

を増やすのは非常に困難なことであった。そこで二人は話し合った。「ただ私たち二人だけ残つて、どうやって人類を増やすことができようか。私たちは兄妹であるのでどうしよう。二人で高い山に登つて一人ずつ山の下へ石を転がし、もし石が山の下でぶつかったら、私たちは結婚しよう、もし石がぶつからなかったら、これも天意であり、それで人類が絶えるのも天意である。私たちにはどうしようもない。」

そして二人は、高い山に登り、山から石を転がした。石は転がり転がり、山の下でぶつかった。そこで二人は「これは、天が人類を増やす責任を私たちに任せたとしたことである」といい、二人は結婚した。

彼らは結婚して、三、五年たち、子どもを一人産んだ。しかしその子は、生まれる時、一つの肉のかたまりであった。また、この生まれた子は体中に口がついていて、ご飯を食べる時にはどの口にも与えてもそれを食べた。この子を見て、二人はとても悲しくなつて「私たち二人が結婚して生まれた子は、こんな奇形児である。私たちは、やはりこの子を殺して捨ててしまおう」と話し合った。そこで二人は斧を持ち山へ行つて、斧でその子を切り碎いた。そして、それを山の下の方へまいてから家へ帰つた。翌日二人

が奇形児をまいた所へ行つてみると、そこには子ども達がいっぱいいいた。子ども達は何かをしゃべっているが、何をしゃべっているかは全く分からない。そこで二人はその子達に「奇形児からなつたものだから、そのまましておこう。骨からなつた人は漢族で、肉からなつた人はトン族で、腸からなつた人はミャオ族である。」と言つた。姜良はまた言つた。「漢族は川辺に住み、トン族は川辺に住んでも、山に住んでも、平地に住んでもいい、ミャオ族は高い山に住みなさい。」だから今でも漢族は川辺に多く住み、トン族は割と散らばつていて、川辺にも山にも平地にも住んでいる。そしてミャオ族は高い山に住んでいるのである。

ここに紹介したのは、中国の特に南方において伝承されている兄妹婚型の話の一つである。洪水を生き残つた兄と妹が、人類を産む際に、天意を知るための儀式をおこなう。ここでは「転がした石がぶつかる」ことであつたが、他の伝承では、多くの場合、礮臼を転がしている。この兄妹婚型神話については、百田弥栄子氏が『中国神話の構造』第四章「射日神話と洪水神話」において一六二話を詳細に分析し、モチーフごとに分類した表（一三二頁）を作成している。その表によれば、「礮臼が合う」モチーフは、

一六二話のうち一〇〇話で語られている。また、「針の目に矢」が通るのが四話、「機の四本の柱芯に矢」が通るのは四話、「苧環に矢」が通るのも二話と、それぞれ語られている。

後に述べるが、難題智譚の難題は、その伝承地域の生業を反映する傾向にある。例えば、農耕民が伝える話なら、難題も農業に関係することが多い。その中であって、兄妹神婚型神話の儀礼をモチーフとした難題は特殊であり、閑索と鮑三娘の伝説の特徴となっている。神話では天意により白が合わさり矢も通るのに対して、閑索と鮑三娘が「一枚の葉を射る」場面は、二人の武芸の腕に頼る内容となり、「白を合わせる」場面では鮑三娘の知恵が発揮される。たしかにこのように三つの難題は二人の力により解決されるが、難題を課す父親の言葉に「我ら夷の夫婦は神が定める」とあることから、兄妹神婚型神話が意識されていることが窺える。

また、難題の第二と第三では、鮑三娘が閑索に助言をおこなっている。前述の通り、この伝説の骨子は昔話の難題智譚となっている。まずは、難題智（娘の助言型）の昔話「竜宮女房」を紹介して、両者の共通性を確認する。

「龍女」【梗概】

曹扎という身寄りが無いアチャン族の若者が、柴刈りと漁で生活していた。ある時、川できれいな魚を捕り、家の水瓶で世話をした。

ある日、仕事から帰ると、家の中はきれいに片づけられ、夕飯もできていた。次の日、仕事に出た曹扎は、家の屋根から上るかじきの煙を見て家に戻った。門を開けると、娘の姿が見えたが、家に入ろうとしたら、娘は水瓶の近くで消えてしまった。さらに次の日、曹扎はこっそりと屋根に上って家の中をのぞいていた。すると、水瓶から娘が現れて家事を始めた。若者は娘に求婚し、娘は自分の正体が、龍女の三小姐であることを明かす。

しばらくすると三小姐は、兄弟に会うために龍宮へ帰ることにした。曹扎も共に行ったが、龍王は彼を殺そうとした。そこで三小姐は、父親と賭をする。父親がさせることを曹扎ができれば負けて、できたらずっと夫婦でいることになる。

最初は、山々の木々を全て伐らなければくびり殺すと言う。三小姐は曹扎に四つの斧をそれぞれ四つの山の頂上におかせ、山で寝かせた。曹扎が言われたとおりにして目を醒ますと、全ての木が切り倒されていた。

次は、その木を全て焼かなければ焼き殺すと言う。三小姐は曹扎に四つの乾燥した牛の肥やしをそれぞれ四つの山の片隅におかせ、寝かせた。洞穴で寝た曹扎が起きて見ると、全ての木が燃えて灰になっていた。

三つ目は、灰を全てすくい取らなければ打ち殺すと言う。三小姐は曹扎に四つの鋤をそれぞれ四つの山の片隅におかせ、寝かせた。日が暮れる時には終わっていたので、龍王は、九斗九升のゴマを一日で撒かなければ射殺すと言う。そこで、三小姐は曹扎に、それを四つの袋に入れさせ、それぞれ山の片隅に置かせて寝かせた。撒き終わった後、龍王はさらに一粒残らず集めなければ煮殺すと言う。三小姐は曹扎に四つの袋をそれぞれ四つの山の片隅に置かせ、寝かせた。起きた時には集め終わっていたが、三粒足りなかった。そこで三小姐は曹扎に山の岩にいるキジバトを射らせる。すると、そのキジバトのすなぎもの中に三粒のゴマがあった。

最後に、龍王は自分と「水を造る」試合を申し込む。龍王は川の上流で水を造り、曹扎には下流で水を造らせると言う。そこで、三小姐は曹扎に筏を造らせ刀を背負わせる。試合が始まると、筏に乗った曹扎に小山のような波と怪物が襲いかかる。曹扎がその怪物を斬ると、それは龍王が化

けたもので、龍王は死んでしまった。曹扎と三小姐は、家に戻って幸せに暮らした。

このように父親が若者に課す難題の一つ一つに対して、娘が手助けをする話で、中国の全土で語られている。その中でも特に娘が天界や竜宮などの異世界の女性である話について取り上げ『中国民間故事集成』を中心に表にまとめた。今回の調査では、前述の梗概を含め二七話の内容を確認できた。その結果、今回は中国南方の伝承が多い結果となった。特に南方の少数民族において伝承が濃厚であり、例に挙げた梗概の話を含めれば、二一話が南方少数民族の話となった。関索と鮑三娘の伝説も、まさにそんな地域において伝えられてきた。

ちなみに、助言者である女性の内訳は天界の娘が二三話、竜宮の娘が九話、仙界の娘が四話、魔王の娘が一話である。天界と仙界の娘の区別が判然としない話はあるものの、竜宮と魔王の娘も含め、助言者の違いによる話の構成の変化はほとんどない。つまり、登場人物や難題に差異があっても、全体の話の筋には影響しないのが、この話の特徴でもある。

難題簪【娘（異界の女性）の助言型】表（出典は本稿末に挙げた）

| 助言者 | 難題を課す者 | 難題の内容 | 備考・伝承地・民族 |
|----------------|----------------|---|--|
| ① 仙女 | 玉皇大帝 | I 妻の三人の弟を庭で探す II 妻の三人の弟を宮殿で探す III 玉皇大帝の長男が放った矢を探す | 遼寧省 朝鮮族 |
| ② 丁香（仙女） | 仙術の師 （丁香の父） | I 一升のゴマを撒く II 撒いたゴマを拾い集める III 薪運び IV かくれんぼ | 仙人の弟子になるため、難題をこなす。 仙女と主人公は、結婚する。 北京市 |
| ③ 九仙姑 | 天上世界の父親 | I 人喰い蚤の精の部屋で寝る II 南京虫の精の部屋で寝る III サソリの精の部屋で寝る IV 母屋で父親と寝る V 庭園で水やり（井戸の近くに龍がいる） VII 三六〇本の竹を切る（竹の中には蛇） | 九仙姑が天界から下界に逃げる際、傘に入つて戻る。 山東省 |
| ④ 七姐（天女） | 老神仙 | I 扉の上の草を抜いて耕す II もみがらで縄をなう III 猿の太鼓を盗む | 老神仙は、最後に太鼓の響きで死んでしまう。 江蘇省 |
| ⑤ 姑娘 （仙人の娘） | 仙術の師 | I 半日で大きな林の木を伐る II 半日でその木を焼く III 半日でゴマを撒く IV 撒いたゴマを拾い集める | 主人公の二郎は瓜から生まれた。 仙人の弟子になるため、難題をこなす。 福建省 |

| | | | |
|----------------------------|-----------------------|--|---|
| <p>⑥ 嬌桃 (龍王の七女)</p> | <p>龍王</p> | <p>I 一日で山を開墾する II 伐った木を焼いて、できた灰を庭園に運んで肥料にする III ゴマを撒く IV 撒いたゴマを拾い集める V かくれんぼ</p> | <p>龍王は負けを認め、主人公に王の座を譲る。 福建省</p> |
| <p>⑦ 三公主</p> | <p>龍王</p> | <p>I 南京虫のベッドで寝る II 一斗のゴマを一日で撒いて、一日で拾い集める III 森の木を一日で伐って、一日で炭にする</p> | <p>福建省 ショオ族</p> |
| <p>⑧ 木姐珠 (天神の娘)</p> | <p>天神</p> | <p>I 九十九の山の木を伐る II 伐った木を焼く III トウモロコシを植える</p> | <p>四川省 チャン族</p> |
| <p>⑨ 木姐珠 (天神の娘)</p> | <p>阿爸木比塔 (天神)</p> | <p>I 岩の下で薪と石を受け止める II 一日で木を伐る III 伐った木を燃やす。ただし、山の裾野から頂上へと順に火をつける IV 三斗の野菜の種を撒く</p> | <p>四川省 チャン族</p> |
| <p>⑩ 西満 (天の樹林神の三女)</p> | <p>塔比甲蒲 (天神)</p> | <p>I 宮殿の扉の上の草を抜いて耕す II 木くずで縄をなう III 猴王の太鼓を取って来る</p> | <p>妻が人と結婚したことで牢に入れられたため、助言をしてくれるのは、天神の長女 四川省 チャン族</p> |

| | | | |
|---------------------|-----------------|--|--|
| ⑪ 仙女 | 天帝 | <p>I 九つの山の木を全て伐る</p> <p>II 伐った木を焼く</p> <p>III 三日以内にソバを蒔く</p> <p>IV 蒔いたソバを拾い集める</p> <p>V 虎の乳を搾って持つてくる</p> | <p>ソバを集めた時、三粒足りなかったが、キジバトのすなぎもから出てきた。</p> <p>四川省 モンゴル族</p> |
| ⑫ 末の妹 (天神の七女) | 嘎納那支森翁丁 (天神) | <p>I 一日で九つのを焼き畑する</p> <p>II 一日でそこを耕す</p> <p>III 一日で九つの山のトウモロコシを収穫する</p> <p>IV 一日で九つの山の麦を収穫する</p> | <p>トウモロコシと麦を収穫した時、それぞれ一粒と半粒足りなかったが、それぞれ白キジバトと黒アリが盗んでいた。</p> <p>四川省 モンゴル族</p> <p>※『中国民間故事全集』第三六巻にも同一人物が語った、ほぼ同内容の伝承が記載。</p> |
| ⑬ 魚姑娘 | 魚王 | <p>I 一日で九つの山の木を伐り 焼き畑をする</p> <p>II 一日でそこを耕す</p> <p>III 一日でそこに種を撒く</p> <p>IV 一日で撒いた種を拾い集める</p> <p>V 魚王と化けくらべをする</p> | <p>種を集めた時、一粒足りなかったが、キジバトのすなぎもから出てきた。</p> <p>四川省 イ族</p> |
| ⑭ 三公主 | 龍王 | <p>I 山での耕作</p> <p>II 荒れ山を果樹の山にする</p> <p>III いけすを造る</p> | <p>貴州省 プイ族</p> <p>※『中国民間故事全集』第一三巻にも同一人物が語った、ほぼ同内容の伝承が記載。</p> |

| | | | |
|---------------------------|----------------------|--|--|
| <p>⑮ 雅巧 (天神の七女)</p> | <p>果達 (天神)</p> | <p>I 毒蛇・虎が来る部屋に泊まらせる II 山・山の平地・平地の木を全て伐らせる III 伐った木を焼く IV そこに粟を撒く V 撒いた粟を拾い集める VI 果公(雷神)の太鼓を借りさせる</p> | <p>果公の太鼓の響きで、果達は死ぬ。 貴州省 ミャオ族</p> |
| <p>⑯ 七妹 (天神の七女)</p> | <p>天王爺</p> | <p>I 虎に添い寝 II ムカデの部屋で宝珠を見る III 木を切り倒し、たくさんの粟を一日で撒く IV 撒いた粟を拾い集める</p> | <p>粟を集めた時、五銭分足りなかったが、背籠鳥がうなじの後ろの袋に隠していた。 貴州省 トン族</p> |
| <p>⑰ 七仙女</p> | <p>天王</p> | <p>I 三日の内に、池を造り、天の池の水で酒を醸し、池の周りに九仙李を植える。</p> | <p>貴州省 スイ族</p> |
| <p>⑱ 襯紅裏白命 (天神の娘)</p> | <p>子勞阿普 (天神)</p> | <p>I 広い森の木を全て伐る II そこを焼く III そこに穀物の種を撒く IV 収穫した穀物をキジバトが二粒、アリが一粒取ったので取り返す V パーラル(山岳地帯の羊)を、天神と捕りに行く VI 魚を天神と捕りに行く VII 虎の乳を搾らせる</p> | <p>ナシ族の神話の一部 雲南省 ナシ族</p> |

| | | | |
|---------------------------|--------------------|---|---|
| <p>①9 孔雀姑娘 (魔王の娘)</p> | <p>匹Y (魔王)</p> | <p>I 金づちで岩を割る II 二つの飯盒に入れた米と粟の内、米を当てさせる III 妻が姉妹たちと手だけを壁の穴から出して、どの手が妻の手かを当てる</p> | <p>最後、魔王を魔針で殺す。 雲南省 タイ族</p> |
| <p>②0 烟似 (天神の七女)</p> | <p>烟侯 (天神)</p> | <p>I 虎を捕まえる II 人喰い婆から太鼓を借りる III 人喰い婆を招待しに行く I 一日でたくさんの粟を撒く II 一日で粟畑を耕す III 一日で撒いた粟を拾い集める</p> | <p>戻る 雲南省 ハニ族 粟を集めた時、三粒足りなかったが、キジバトのすなごもから出てきた。 雲南省 ラフ族</p> |
| <p>②1 左雅米 (龍姑娘)</p> | <p>龍王</p> | <p>I 龍王と足を向かい合わせて寝る II 山の木を伐る III その木を焼く IV そこを耕す V 穀物の種をまく VI まいた種を拾い集める VII 六粒の種を取った二羽のキジバトを射る VIII 龍王と狩りに行く IX 帰らない猟犬を探す X 龍王と地の果てへ行く XI 銅鑼を打つ試合</p> | <p>最後、龍王は銅鑼(鉦鑼…三つの銅鑼が一架にかけられている打楽器)の響きで死ぬ。 雲南省 ヌー族</p> |
| <p>②2 魚姑娘 (龍王の娘)</p> | <p>龍王</p> | | |

| | | | |
|--------------------------|--------------|--|---|
| <p>②③ 魚姑娘 (龍王の娘)</p> | <p>龍王</p> | <p>I 一日で七つの豚小屋、七つの牛小屋、七つの倉庫を建てる II 一日で七つの山の木を伐る III その木を一日で焼く IV 一日で一万斤の種を撒く V その種を一日で拾い集める VI 龍王と狩りに行き、アカジカを仕留める</p> | <p>雲南省 ジノー族</p> |
| <p>②④ 龍王の女兒</p> | <p>龍王</p> | <p>I かくれんぼ II 開墾・焼き畑 III 狩り IV 弓を崖に射込む V 猿から銅鑼を借りる</p> | <p>雲南省 リス族 龍王は、最後に銅鑼の響きで死んでしまう。</p> |
| <p>②⑤ 仙女 (七仙女の末)</p> | <p>仙女の父親</p> | <p>I 人喰いの夏山婆の銅鑼・太鼓を借りる II 虎を捕まえる</p> | <p>広西チワン族自治区 チワン族</p> |
| <p>②⑥ 姑娘 (天神の三女)</p> | <p>天神</p> | <p>I 一日で四斗の裸麦を撒けるほどの土地の木を伐り焼く II その土地を耕す III その土地に四斗の油菜の種を撒く IV 撒いた種を拾い集める</p> | <p>チベット族神話「種の起源」の一部 種を集めた時、三合足りなかったが、ハトのすなぎもから出てきた。 チベット自治区 チベット族</p> |

この表には挙げていないが、男性はどの話でも、この世の人間である。働き者であったり、身寄りが無く貧しかったりするが、いずれも清く正しく心根の良い人間あり、異世界の女性に見初められる。そして異界を訪れた男性に異界の王である女性の父親が難題を課す。このように、この世と異界の対比構成となつている。この構成は、そのまま閑索と鮑三娘に当てはまる。閑索は漢（この世）の男性で、鮑三娘は夷（異界）の女性である。そして、話の舞台も夷（異界）を訪れた閑索に、異界の王である鮑龍が難題を課す。

さらには鮑三娘の背景には、龍宮のイメージが窺える。まず、先に挙げた「鮑三娘（諸葛亮南征の伝説）」に登場する父親の名は「鮑龍」であり、話の構造も「竜宮女房」の難題譚と同様である。また、『花關索傳』では、鮑王の娘で「南海赤龍鱗甲」から鎧を作れる人物として登場する。

加えて、この「鮑三娘」の呼び名についても龍宮との繋がりを窺わせる。そもそも「鮑三娘」は「鮑王の三番目の娘」という意味である。例えば『花關索傳』では、鮑三娘は閑索の第一夫人であるが、第二夫人と第三夫人にはそれぞれ「王桃」「王悦」と名が与えられているのに比しても異質である。

この「鮑三娘」のモデルには、中国の昔話「竜宮女房」に登場する姫を想定できる。

例えば、われわれ日本人が龍宮の姫といえは「乙姫（乙は兄弟関係にある内の年少者）」を想起するように、中国の龍宮の姫が兄弟関係の中で登場する時は、三番目の姫になることが多い。前掲の表の中でも⑦と⑭は「三公主（三番目の姫）」である。他にも難題譚を伴わない「竜宮女房」の話で管見の呼び名を拾うと次のようである。

1 「龍三姐」『中国民間故事全書』河南・南召卷（四三二）
四三三頁

2 「龍三妹」『中国民間故事全書』山東・台兒庄卷（二二〇）
二二三頁

3 「龍王三閨女」『中国民間故事全書』山東・薛城卷（二四五）
二四七頁

4 「龍王的三女」「三公主」『中国民間故事全書』河北・保定新市区卷（三〇七）三二二頁

5 「三公主」『中国民間故事全集』第一四卷（三五一）
三五七頁）／『佗族民間故事選』（四六）五二頁

このように呼び名にバリエーションがあるものの、いずれも「龍王の三番目の娘・姫」を意味している。

つまり、先に挙げた龍宮との共通点も踏まえれば、「鮑

三娘（鮑王の三番目の娘）」は、中国で広く語られる「竜宮女房」に登場する「龍王の三番目の娘」から形成された人物であると考えられる。思えば「鮑」も「龍」と同じく水に関わる生き物であり、この点からも共通する。

「竜宮女房」に登場する龍王の娘は、いつでも「清く正しく心根の良い若者」を見初めて結婚する。それを思えば、鮑三娘に見初められた関索は、彼女と結婚することで「清く正しく心根の良い若者」であることが誰の目にもはっきりとしたと言えよう。

注

- (1) 金文京『三国志演義の世界』増補版 二〇一〇年 東方書店
- (2) 古屋昭弘・井上泰山・大木康・金文京・永上正『花關索傳の研究』一九八九年 汲古書院
- (3) 劉守華主編『中国民間故事類型研究』二〇〇二年 華中師範大学出版社
- (4) 中国民間故事集成全国編輯委員會『中国民間故事集成・黒竜江卷』（七七三～七七五頁）二〇〇五年 中国 ISBN 中心
- (5) 「民間文学」（一九八一年第六期）（五九～六五頁）〔涼山文芸〕一九八一年 第三、四期合刊からの転載
- (6) 中国民間故事調査会『中国民話の旅』（二〇一一年 三弥井書
- (7) 百田弥栄子『中国神話の構造』二〇〇四年 三弥井書店
- (8) 賀学君・茅魯敏・張焯編『中国民間愛情故事』（四五～四六〇頁）一九九六年 中国廣播電視出版社
- 店）に「人類の起源」（一三三頁）として収録。
- ① 中国民間故事集成全国編輯委員會『中国民間故事集成・遼寧卷』（四三一～四三四頁）一九九四年 中国 ISBN 中心
- ② 中国民間故事集成全国編輯委員會『中国民間故事集成・北京卷』（六九八～七〇〇頁）一九九八年 中国 ISBN 中心
- ③ 本書編委会『中華民族故事大系』第一卷（三二一～三二九頁）一九九五年 上海文芸出版社
- ④ 中国民間故事集成全国編輯委員會『中国民間故事集成・江蘇卷』（五五九～五六二頁）一九九八年 中国 ISBN 中心
- ⑤ 中国民間故事集成全国編輯委員會『中国民間故事集成・福建卷』（五五五～五五七頁）一九九八年 中国 ISBN 中心
- ⑥ 中国民間故事集成全国編輯委員會『中国民間故事集成・福建卷』（五五七～五六二頁）一九九八年 中国 ISBN 中心
- ⑦ 本書編委会『中華民族故事大系』第八卷（二五九～二六四頁）一九九五年 上海文芸出版社
- ⑧ 中国民間故事集成全国編輯委員會『中国民間故事集成・四川卷』

- 下(一一一)～(一一二頁) 一九九八年 中国 ISBN 中心
- ⑨ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・四川卷』
下(一一二)～(一一五頁) 一九九八年 中国 ISBN 中心
- ⑩ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・四川卷』
下(一一五)～(一一七頁) 一九九八年 中国 ISBN 中心
- ⑪ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・四川卷』
下(一四七)～(一四八頁) 一九九八年 中国 ISBN 中心
- ⑫ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・四川卷』
下(一四八)～(一四八四頁) 一九九八年 中国 ISBN 中心
- ⑬ 陳慶浩・王秋桂主編『中国民間故事全集』第一六卷(二七七頁)～
二九二頁) 一九九九年 遠流出版(台湾)
- ⑭ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・貴州卷』
(四三九)～(四四三頁) 二〇〇三年 中国 ISBN 中心
- ⑮ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・貴州卷』
(五九二)～(五九七頁) 二〇〇三年 中国 ISBN 中心
- ⑯ 陳慶浩・王秋桂主編『中国民間故事全集』第一四卷(三五八頁)～
三六五頁) 一九九九年 遠流出版(台湾)
- ⑰ 本書編委会『中華民族故事大系』第九卷(九二)～(一〇〇頁)
一九九五年 上海文艺出版社
- ⑱ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・雲南卷』
上(四九)～(六一頁) 二〇〇三年 中国 ISBN 中心

- ⑲ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・雲南卷』
上(五四九)～(五五八頁) 二〇〇三年 中国 ISBN 中心
- ⑳ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・雲南卷』
下(一〇四七)～(一〇五一頁) 二〇〇三年 中国 ISBN 中心
- ㉑ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・雲南卷』
下(一〇六三)～(一〇六七頁) 二〇〇三年 中国 ISBN 中心
- ㉒ 中国民間故事集成全国編輯委員会『中国民間故事集成・雲南卷』
下(一一〇〇)～(一一〇四頁) 二〇〇三年 中国 ISBN 中心
- ㉓ 本書編委会『中華民族故事大系』第一六卷(八九八)～(九〇二頁)
一九九五年 上海文艺出版社
- ㉔ 『中国民間故事選』(第一集) 第二版(四七五)～(四八四頁)
一九八〇年 人民文学出版社
- ㉕ 本書編委会『中華民族故事大系』第三卷(三九七)～(四〇四頁)
一九九五年 上海文艺出版社
- ㉖ 陳慶浩・王秋桂主編『中国民間故事全集』第四〇卷(一七頁)～(三五頁)
一九九九年 遠流出版(台湾)
- 〔キーワード〕 民間説話・三国志・『花關索傳』・関索・鮑三娘